ひまわりフェス

ボランティア　課外活動
地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科３年　新井　淳也

連携先

一般社団法人　ならはみらい

顧問教員

伊藤　哲司（人文学部・教授）

参加者

新井　淳也（人文学部３年）
大枝　俊貴（人文学部２年）
袖山　良美（人文学部２年）
小林　竜一（人文学部２年）
小野寺　岳（教育学部１年）
岩崎　　彩（人文学部１年）
飯塚　昌広（農学部１年）
大谷　智之（人文学部１年）
本田　茄純（人文学部４年）
高橋　佑奈（人文学部１年）
千村　瑠香（人文学部１年）

プロジェクトの概要

私たち茨大東北ボランティアFleurは東日本大震災による福島第一原発の事故で全町避難となった福島県楢葉町の再建を目的に活動している一般社団法人「ならはみらい」及び住民グループ「なにかし隊」と協力し楢葉町においてプロジェクトを実施した。

プロジェクトの目的としては第一にもともとの地域コミュニティーが崩壊してしまった楢葉町で新たに住民同士での交流の機会を作る、第二に東日本大震災から５年が経とうとし次第に薄れていく興味や関心に対して改めて東北について、震災について自分の足で実際に訪れ、考えるきっかけづくりを目的とした。

プロジェクトの流れとしてはまず準備段階として楢葉町でのボランティア活動（「風とロックCARAVAN福島～楢葉町～」「2015いくならならは。「リニューアルフェスタ」」「ふたばワールド2015 in ならは」）を行い、連携先および楢葉町の人々と信頼関係を築き、その集大成として住民たちの交流の場、「もちつき交流会」を設けることがとした。その場では茨大のサークル（Gitarre!!、マジックサークル「アンビシャス」、大道芸サークルスウェット組合、よさこいサークル－海砂輝－）にご協力いただき、パフォーマンスをしてもらい交流の場であるとともに憩いの場であることも目指した。また餅つきに参加したり、ついたお餅を住民の人たちと一緒に食べるなど学生と住民との交流も図った。さらにキャンドルナイトも行い改めて被災地へと思いを馳せるきっかけとすることができた。

プロジェクトの成果報告

〈プロジェクト内容〉

本プロジェクトでは連携先および楢葉町の人々との関係づくりから始めた。まず六月に「風とロック　CARAVAN福島～楢葉町～」に参加し楢葉町の視察を兼ね参加した。そこでは楢葉町役場の方を始め色々な方と知り合うことができた。

次に９月に「2015いくならならは。「リニューアルフェスタ」」に「ならは応援団」の一員でボランティアとして参加した。楢葉町にある温泉施設の震災以来のリニューアルイベントでここでは楢葉町のご当地ゆるキャラゆず太郎やゆりかちゃんのアテンドや子どもたちとのふれあいなどを通して地域の人々との交流を図った。

ゆるキャラのゆりかちゃん

10月には「2015いくならならは。「リニューアルフェスタ」」に同じくボランティアとして参加した。福島県の双葉郡の8町村の人々の再開、交流を目的としたイベントで各町村の持ち回りで毎年行われており今年は楢葉町で開かれた。イベントでは楢葉町の住民グループ「なにかし隊」との協力で手ぬぐい販売や東日本大震災の際に楢葉町が支援を受けた茨城県堺町に対しての募金活動（東北関東大豪雨による被害）などの手伝いを行った。

ここでは「なにかし隊」や同じくボランティアとして参加していた立命館大学の方々とも出会うことができ新たなつながりを作ることができた。

募金を呼びかける様子

なにかし隊と販売した手ぬぐい

また楢葉町の活動ではないが12月に茨大内でキャンドルナイトを行った。そこでワークショップの参加者には楢葉町の人々へのメッセージを貰い茨城にいながらも震災を考えるきっかけづくりとなった。

茨大で行ったキャンドルナイト

茨大生に書いてもらったメッセージ

最終的にこれまでの活動の集大成として楢葉町で住民グループのなにかし隊や、ならはみらいとの協力で１月17日に「もちつき交流会」を行った。餅つきを行いついたお餅をその場で食べたり、ビンゴ大会を行い楢葉の人々との交流の場とした。茨大のサークルにも実際に楢葉に赴きそこで自分たちのパフォーマンスを披露してもらいイベントを盛り上げてもらった。

茨大生に行ってもらったパフォーマンス

参加した楢葉の人々は茨大生のパフォーマンスに対して元気をもらうことができたなどと声をかけてくださり短い時間ではあったがその場を楽しんでもらえた。会場では集まった楢葉町の人々の「久しぶり」など久々の再開を楽しむ声も聞こえた。お餅を食べ、こたつを囲み楽しそうに話すなど大学生と住民との交流もでき被災当時の貴重な体験を聞く良い機会が作れた。

ついたお餅を食べる参加者の様子

楢葉町の方の案内で視察を行い茨大生に楢葉を見てもらう事ができた。津波によって家々が流されてしまい何もなくなってしまった場所や、積み上げられた放射性廃棄物、家主が帰ってこず誰も帰ることのない家など実際に自分の目で見て自分の耳で聞くことでより心に響くものであった。

町民の方の話を聞く茨大生

またイベント後にはキャンドルナイトを行った。茨大生以外にも残ってくれた住民の方やスタッフの方も参加してもらい楢葉町の方々が希望を持って日々の生活が出来るようにという願いを込め「きぼう」の３文字をつ

くった。そこでは茨大で行ったキャンドルナイトでつくってもらったキャンドルも使用した。

〈参加者の声〉

イベント終了後に茨大生に書いてもらった感想文では

実際に現地に行ってみなければわからないようなことを知ることができたり、前向きな楢葉町の人々と触れ合うことを通じて、自分たちが逆に元気をもらうことができた。

当時この高台にいた人はいったいどんな思いで町が、人が、思い出が流されていくのを見ていたんだろうかと考えたら、やるせない気持ちになった。

など様々な意見を得ることができた。

〈まとめ〉

大学生と楢葉町の人々とのかかわり合いの中、両者の間で楽しさを共有できたのであれば幸いである。パフォーマンス終了後も学生たちはお餅を参加者の方と一緒に食べ、参加者同士の話を聞いたり、そこへ混ざっていったりもし、住民同士の交流の場、住民と茨大生の交流の場として機能していた。

震災当時やその後の話をその体験者から直接に聞くのは報道や意向調査などで情報を知るのとは大きく異なる。それほどに生の声は重く深く心に響く。震災から５年が経とうとする中、私たちができることは限られてくるが、被災地のことを知ること、忘れないことが重要となるのではないか。

〈今後の課題、展望〉

楢葉町では今後の課題も多くある。医療、教育機関や商店の不足や住民たちの心のケアなどこれから対応していかなければならない。私たち学生は行政の手の届かないような個々の場合での住民のケアを行っていきたい。私たちは本プロジェクトを通して楢葉町の人々の関係性づくりを目的としてきた。しかし今回の一度だけでコミュニティーの再構築や新たなつながりができたとは思わない。町に戻る人も戻らない人も一度は同じ町にいたのだから震災でこれっきりとなってしまうのは寂しい。懐かしい知人、友人とまた出会える、そのような場を継続的につくっていくことが必要である。これまでの思い出を語り合い、現在の近況を報告するような住民たちが会する場を作れれば良い。

参加者全員での記念写真